

Title	マホメット物語：人間として、預言者として
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.215-p.236
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79629">https://hdl.handle.net/11094/79629</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# マホメット物語

—人間として、預言者として—

勝 藤 猛

Muhammad, Man and Prophet

Takeshi KATSUFUJI

Muhammad was born around 570 in Mecca, a commercial centre of Arabia. After he became an orphan in his childhood, his clansmen looked after him. A widow with inherited property first employed him as her agent in a caravan to Syria, and then took him as husband. At the age of forty, Muhammad used to meditate in a cave in the hills outside Mecca. One night, he saw a vision breaking the dark sky. Then, one day a call came to him in pure Arabic. In the course of these mystic experiences, he realized that he was the messenger of God.

The author tries to elucidate Muhammad's vocation, from not only historical, but also spiritual points of view. While he was meditating, various elements of Judaic and Christian teachings and beliefs that Muhammad was in daily contact with suddenly took a fresh form and new meaning, which he came to consider as revelations. It prompted him to warn against the disintegration of social solidarity of the Meccan citizens resulting from the growing mercantile economy, and to create a new set of morals based on individual, not tribal, principle that would lead toward a universal religion.

## I 文献とは何か

マホメット伝を試みる。同時代の文献としては、彼が受けた啓示をその在世中に編集し始めたコーランがある。しかしそれは伝記の材料として少な過ぎる。それで頼れるのは、いわゆる聖伝 Hadith である。ただそれは、マホメットの死後、125年たってから、編集の始まったものである。しかも紙はまだなかったから、記録は少なく、ほとんどが口伝によるものであった。日本でこの原稿を綴っている1993年から125年前といえ、明治元年に当たる。現在、明治維新について言い伝えだけを使って書いたら、信用されるだろうか。

聖伝とは何かについて、中村廣治郎はいう：ハディースは「預言者ムハンマドの言行についての伝承」の意に限定され、預言者のスナ「範例」の“容物”とみなされるようになった。ハディースはイスナードとマトンの二つの部分よりなる。イスナードとは、当のハディースを伝えた伝承者の名前を列記した部分を指し、伝承の本文（内容）をマトンという。またハディースの真偽を見分ける方法として、イスラム教徒学者はマトンの内容には触れず、イスナードだけに注目した。すなわち、時代的・空間的にみて、接触・口伝が実際に行われたか、一つのハディースを何人の教友が伝えているか、個々の伝承者は人格的に信頼できるか、党派的傾向をもった人物はいないか、要するに、伝承者の鎖がどの程度完全であるかが、吟味された。これに対し西洋人学者は、マトンの内容が、コーランの思想に矛盾しないか、時代的にムハンマドの言行とみなしうるか、を検討する。

信頼できる伝承者の完全なリンクによって中断なく預言者自身までたどれるハディースを「真実なもの」サヒーフとし、伝承者の鎖がどこかで欠けていたり、その中に信頼できない人物がいるようなハディースを、信頼性において「弱いもの」ダイーフとした。これらの中間として「良好なもの」ハサンがくる。<sup>1)</sup>

このような性質をもつ材料を使って書くマホメット伝がどんなものであるか。結局は物語ではない。そもそも歴史学の根本史料なるものも、程度の差こそあれこんなもので、著者の主観がこめられていることを考慮しなければならない。

このマホメット物語は、聖伝の上に、日本・西洋の“サヒーフ”な学者の伝承をつけ加える。聖伝を使うのより、真実性においてまさるかもしれない。

## II アラビアとはどんな所か

マホメットが一生を送った土地は、今の国で言えばサウジアラビア王国であり、地理的にはアラビア半島の大部分を占める。日本国と比較すると、面積は5倍、人口は10分の1である。年間降水量は、首都リヤドで約80mm、そのすべてが1月から5月までに降る（日本はほぼ1,500mm）。

乾燥にはいくつかの長所があろうが、その一は、清潔である。病原菌が繁殖する余地がない。湿潤地での清潔は水で洗うことであるが、乾燥地では乾燥自体が清潔を守る。第二に、乾燥は気化熱を奪い、水を冷たく保つという作用をする。

アラビアの自然につき、日本人の記録を見よう。まず1939年、中野英治郎による。

平原：

我々の自動車は玄武岩と花崗岩系の巖々たる山系の間に進み入った。地表は相当固い岩盤で形成されているためか、昨夜蒙ったような砂地の憂き目は見る必要はなかった。しかし峠は益々狭まって、半時間後には、幅1間たらず、自動車が1台かろうじて通れるぐらいの細い谷間に入りこんだ。一度驟雨来れば、直ちに激流の谷川と化するものらしく、車の進行を阻む大小各様の石塊は、すべて水流に洗われた後、歴然たるものがある。

(中略)

見渡す限り何物も遮るものなき空漠たる水平の平原が、遠く地平線に連なっている。表面は砂礫の微細な岩片でおおわれている。まさにアスファルト道路を際限なく押し広げたような天然のドライブウェイと見るべく、またそのまま直ちに近代的な飛行場となすことができる。

井戸：

ジャラーナ 国王が村人のために掘らせた。直径1m余、正方形の井戸枠、深さ10m余。

アシーラ 深さ10尺余、濃厚な塩分を含む。井戸枠はセメント作り、国王の建設にかかるという文句の彫られた石碑あり。水を汲むバケツは羊の皮袋。

ダフィーナ 井戸枠なし、口径1.5m、水面まで15m、塩分濃厚。

ホーフ 口径2尺余、深さ数m、5,6人の遊牧民が100頭ほどの羊に水を与える。水は塩分が濃い、彼らは平気で飲む。

ナツメヤシ：ムラという名の集落

高さ数丈に亭々と生い茂った無数のナツメヤシ樹の青々とした葉の重なりと、このヤシ樹を薪のように一束につかねてぐると巻きつけている帯のような、高低のある泥壁が見える。……紺碧の空にすくすくと延びた清新そのもののような水々しい濃緑、しかもそれが一本や二本でなく、数千本が、各々言い合わせたようにすくくと立った数丈の幹の上に、あのナツメヤシ特有の、単純な中にも古淡の趣きがある上広がりの刃状の葉の束を作っている。〔国賓という一行の身分では、旅行中の食物にナツメヤシの実はない〕

茶店にディックといって、ヤシの葉で編んだ高さ4尺余の床几のような椅子がある。

雨：

4月7日、朝から曇りがちの脅かすような空模様だったが、突如、驟雨が襲ってきた。

……スーク（市場）の入り口には、湾岸地方から到着したらしい隊商が、泥濘の中に十数頭のらくだをべっとりと脆かせて、ずぶ濡れになった麻布包みの振り分け荷物を下ろしている。雨滴がぼとぼと落ちている。……突如、家の背後、台地の方向から轟々たる響きが聞こえてきた。見ると、ヤシの木の向こうの台地の崖が、豪壮な泥水の滝に変わっている。幅は数町以上、高さ百尺ぐらいの濁水がどうどうとまっすぐに落ちている。……つい先程まで石塊と砂で白々としていたワーディ・ハニーファ〔リヤード近くを西北から東南に走る水なし河谷〕の河原が、

一瞬にして幅二三百メートルの大激流と化している。

乾燥による冷却：

ラジエーターは沸騰している。運転手とともに直ちに掩蓋を持ち上げ、エンジンを冷却するとともに、羊皮袋の水をジャケットに補給した。この羊皮袋はラジエーターに吊るしてあるため、中の水は、自動車の快速によって起こる疾風に、袋の表面から急に蒸発して、まるで凍えるように冷たくなっている。<sup>2)</sup>

1965年夏、本多勝一・藤木高嶺の記録によると、

乾燥による冷却：

砂漠の民は超異常乾燥を日常生活で役立てている。西瓜は細かくきざんで、水をふりかけ、熱風に数分間さらすと、気化熱によって冷たくなる。気温47度の中で西瓜は24度まで冷えた。……ベドウィンは、井戸水を羊の皮袋につめて遊牧に出る。表面ににじみ出る水が気化熱を奪うので、中の水は冷たい。

井戸：

少年が井戸縄につかまると、井戸のふちに取り付けた滑車を利用して、深さ約9メートルの井戸の底へみんなでおろしてやる。そこへ家畜の皮か古タイヤで作った袋状のつるべをおろすと、少年がこれに水を満たす。外にいる連中は、みんなでそれを引っ張り上げて、井戸のふちに置いたタライに水を移す。〔水質について言及ない〕

ナツメヤシなど食糧：

ファヘド一家と私たちは、ナツメヤシとお茶の朝食をとった。ナツメヤシの実は、味も色も日本の干し柿に似ている。私たちには甘すぎるが、これは砂漠の民にとって、古来、きわめて重要な食糧だ。

ベドウィンが肉を食う量は、日本の都会人より少ないだろう。……冷蔵庫などないので、羊を殺したら、直ちに食べてしまう必要がある。一家族で食べきれないときは、親しい者同士で招待し合う。彼らの主食は、むしろ乳または乳製品と、ナツメヤシの実であって、肉や最近多くなった米はごちそうの部類なのである。<sup>3)</sup>以上、日本人の記録。

アラビア半島の大部分は砂漠が占めているから、人間の生活は牧畜の上に成り立っている。紀元前2千年紀に、ラクダが砂漠にもっとも適した動物として飼育されるようになった。それは広大な荒地を通過するのに、十分な能力をもつ。例えば、200kgの荷物を背にして、1日100kmを進む。少量の草をたべれば、水なしで、40℃の気温の中を20日歩き続けることができる。「アラブ人はラクダに寄生している」とは、諺のようになっている。本多によれば、ラクダ1頭は1度にバケツ7杯ほどの水を飲む。何十頭かに飲ませるには、何時間も休みなしに井戸水を汲み続けなければならない。

アラビアの植物の代表はナツメヤシである。普通のヤシが熱帯産であるのに対し、ナツメヤシは亜熱帯のものである。それは「木のなかの木」「アラブ人の母・おば」と称される。成育のた

めの気候条件として、暑い期間が長く、実が熟する時（9月が収穫期）に雨が降らないこと、がある。諸種の土壌にも耐えられ、とくに塩分に強いのが取り柄である。原産地はメソポタミアで、前3000年ごろから栽培されている。人類はこの貴重な樹木を最大限に利用してきた。すなわち果実は食料、幹は家屋の建材、中肋（葉の真ん中の筋）は家具の材料、葉は籠に編み、葉柄は燃料、実の柄は綱や燃料、繊維は綱、種は挽いて家畜の餌にする。果実からはまた、シロップ、アルコール、酢も作られる。

### III アラブ人社会はどんなであったか

遊牧民と農耕民・都市民は相互に共存関係にある。遊牧民はその運動性から軍事力にすぐれる。農村は砂漠の中に点々と孤立しており、防御力に乏しいから、遊牧民を用心棒として雇う。遊牧民はラクダの隊商を組織して、長距離貿易を営む。北は地中海東岸、南はアフリカ、およびインド洋の彼方のインドとの、商業に従事する。またあるものは、自分の部族の支配下にある地域を通過する隊商から、通行税を徴収して所得とする。

より小規模の通商として、遊牧民と農民の間の共存関係がある。前者はラクダの乳を、後者はナツメヤシを、提供し、それが双方の民の主食となる。都市は商人や職人の集まる場所である。有力な遊牧部族の長が、不在地主のように都市に住み、そこから周辺の遊牧民を支配することもある。これら三種の住民は、どれも血縁集団で構成されている。血縁といっても厳密に血が続いているのではなく、共通の祖先から出たという形、つまり作られた系図をもって血縁集団の証拠とする。アラブ部族名は、先祖の人名を取って「だれその息子」という意味で、「バヌー・だれそれ」と呼ぶ。日本語では「某家」とも「某氏」とも訳される。

普段は平和な関係も、時に緊張することがある。アラビアではしばしば極度の窮乏に襲われることがある。生死の境に追いやられれば、自分より相対的に豊かな集団を暴力で攻撃する。これはある程度認められていた。ただ不文律があって、物を奪うにはできるだけ流血を避けるべきであった。つまり計略を用いて、相手より圧倒的に優勢な力を集中し、抵抗を諦めさせるのが、すぐれたやり方とみなされ、その評判が広まったであろう。頭と力をもってする勝負は、現在のスポーツに似たものであったろう。もし一旦、殺人が発生すると、必ず復讐としての殺人が行われる。もし復讐をしなければ、後々まで汚名を蒙ることになる。この復讐がさらに復讐を招いて、対立が果てしなく続く。それがわかっているからこそ、人命尊重を第一とするのである。

血縁集団の成員相互の関係は、いちおうは平等である。各部族は一種の選挙により、族長sayyidを選ぶ。その役割は部族の意見を導くだけでなく、それに従うことにある。その権威は彼の個人的名声に存する。彼はたえずそれを維持すべく努力する必要がある。名声を失えば、地位もなくなる。従って彼は自らの資質を示さなければならない。それは、一面では部族のメンバーに対して常に親切・寛容であり、部族内の声なき声に耳を傾けなければならない。他方、外に向かっては、断固として勇気を発揮すべきである。

部族の成員に期待される資質は、厳しい自然条件に対決する精神的・肉体的強さである。この資質は *murū'ah* 「男らしさ」と呼ばれる。中村によれば、ムルーアとは、勇気、堅忍、名誉を重んずる高貴さ、氏族への絶対的忠誠、気前のよさ、寛大さ、弱者の保護と救済、等々、要するに、氏族内の相互扶助、およびその秩序維持と地上的繁栄に寄与する徳目のことである。また井筒俊彦によれば、イスラム以前のアラビアの精華は、いわば砂漠の騎士道で、例えば、困っている人を見れば、次の瞬間に自分の生活がどうなるかということなどお構いなしに、持っている限りのものを、乞われもしないうちからくれてやり、一時に数百頭のラクダを屠って、見ず知らずの客人を心の限り饗応する、ことである。<sup>4)</sup> この理想に向かう動機は、*'ird* 「名誉」の感情である。世間に対して恥づかしいことをするまいという気持ちが、彼らにとって宗教の役割を果たす。

集団間には格差が生ずることがある。ある部族が貿易または掠奪によって、他の部族にまさることがありうる。その中の優秀な分子は個人的に高い地位を得る。そのあるものは奴隷を所有することもある。奴隷は、よそから買われて来た者、戦いの捕虜、または債務を払えない者である。しかし、遊牧という移動生活は、奴隷所有となじまない。奴隷は解放されても、元の主人に何らかの形で従属する。またある職業たとえば鍛冶屋は、劣ったものとみなされた。

女性の地位を、遊牧社会と定着社会とで比較するならば、前者においてより高い。

総じてアラブ人の間で、芸術は発達しなかった。詩はその例外である。どんな質問にも巧みに答える才能や、部族の集まりでの議論から教訓を学び取る能力を備えた人が、雄弁家として尊敬を得る。賢人は高い評価を受けるが、詩人 *shā'ir* のそれはさらに高い。詩人が偉いとされ、さらには恐れられるのは、彼が精霊にとりつかれていると考えられているからである。詩人の役割として、宣伝という面に注意する必要がある。彼は砂漠のジャーナリストである。お祭りの場で、討論会が催され、自分の部族の自慢を言い、相手部族をこき下ろして、激しい言論戦を演ずるに、文章がすべて同じ韻を踏む、という芸当を示すことが求められる。侮辱すれすれの皮肉や、露骨な自慢に近い自己顕示の発言に、聴衆は拍手を送った。

アラブ人は宗教にふけることが稀であった。彼らは現実主義者で、空想を排除した。厳しい自然に立ち向かうのに、超自然的存在はあてにならぬ。頼るものは、最初から最後まで人間である。それも部族に属する人間である。もちろん人間の能力には限界がある。運命のいたずらは、どうしようもない。悲観的人生観に陥るのは避けられない。でもやはり砂漠の生活において、遙かなるものに思いを寄せる暇はない。現実の自分の強さと弱さを正確に認識することが、生きのびるための知恵であった。

人間の力で理解できないことが、身近に発生することから、彼らは単純な超自然的存在を認めていた。例えば *jinn* である。それらは見えないか、または動物の姿で現れる。日本の狐か狸のようなもので、人間に対していたずらをすると思われていた。<sup>5)</sup>

樹木や石に精霊が宿ると考えられた。木は乾燥地にあつて極めて貴重な存在である。石は、珍しいもの、例えば隕石、人間の形をしたものが、崇拜の対象となった。大空や星にも神が住むと

信ぜられていた。

崇拜の対象は部族ごとに異なっていたが、アラビア半島を通じて第一の神はアッラーと呼ばれるものであった。ヒジャーズ地方（メッカ、メディナを含む）では、アッラート、ウッザー、マナートの三女神が、“アッラーの娘たち”という地位にあった。諸所に神社のようなものがあり、そのご神体は多く石であった。神社の境内では殺生が禁止されており、その結果、そこは人が生命の危険から逃れるための避難場所となった。

今までアラビアをひとつの地域として論じてきたが、より細かく見るなら、南アラビアを独立の歴史的地域とみなすことができる。まず自然条件が異なる。すなわち、ここはインド洋の季節風をまともに受けて、所によっては年間降水量が1,000mmにも達する。その水をダムなどの灌漑施設により有効に利用して、農業が栄えた。

この地方の経済的發展にとくに寄与したのは、香料の生産ないし貿易である。山田憲太郎によれば、次のようである。乳香はアラビア南部のドーファル地方〔ハド라마ウトの東隣〕と、東アフリカのソマリーランド北部に生育する芳香ゴム樹脂である。これを焚くと、ただちに燃焼して、黒煙の煤を出す、香気は弱い。炎が出つくすと、しばらくの間くすぼって、白い優雅な香煙を出す。インセンスは、本来、香を焚いた煙、すなわち香煙であって、焚香料全体を指しているが、その純なものが乳香で、それがインセンスの代表とされていた。古代の香料の使用は、東西両洋の世界を通じて、宗教上の礼拝のために、祭壇で香料を焚いたことに始まる。火で焚いて煙とともに馨香をみなぎらせる焚香料が、古代人にまず香料として取り上げられた。彼らの崇拜する天や神や仏と、彼ら人間を結ぶ最上の仲介者は、香の煙だと信じられたからである。佳香は神仏や天を喜悅させ、人間を楽しませ、恍惚の境地に誘ってくれる。この仲介者である焚香料は、乳香をもって代表されていた。

没薬は、アラビア西南部のアデンとモカから奥の限られた地方の山岳地帯と、ソマリーランド北部に育成する芳香ゴム樹脂である。焚くとただちに燃焼するが、煙は少なく、煤は出ない。くすぼると、やや刺激性のある香煙を出す、乳香とは異なった匂いである。没薬はインセンスであるとともに、薬物として広く使用された。人間の疾病を癒し、生命を伸ばしてくれる救い主、医師であると見なされた。

胡椒については、インド産のそれがローマ市民に愛好されたことによって、若い男女は食欲の増進と味つけ、すなわち今まで彼らが知らなかった刺激性の辛辣さと香味に、インドの胡椒なしにはすまされないようになった。

そして、当時、南アラビア紅海入り口地帯のサバ人が、東アフリカ、南アラビア、インドの物資の西方への中継ぎ取引を支配しており、サバ人の富はそれによって得られた。紀元前後のストラボンの地理書には、サバ人は金銀の家具調度品を多く所有し、ベッド、三脚台、大盤、種々の盃など、すべて金銀である。住宅も豪華をつくし、入り口、天井、壁は、象牙と金銀に宝石をちりばめている、とある。<sup>6)</sup>



南アラビアではすでに、紀元前8世紀には、灌漑と貿易を基礎として、都市文明の段階に達していたといわれる。国家として、サバ、マイーン、カタバーン、ハドラマウト、アウサーンなどがあり、立憲君主制すら見られた。しかし相互に同盟・抗争を繰り返し、統一政権にはならなかった。都市、民家、寺院、水利施設が最近発掘され、この地の民がすぐれた建築技術の持ち主であったことが、明らかになった。そこにはローマ、ヘレニズム、インドの影響が見られる。また彼らは文字を使っており、碑文が数多く見つかっている。このような南アラビア定着民の文明、すなわち、組織された国家制度、豊かな生活は、その北方に住む、物質的には極度に貧しい、それでいて自由奔放な遊牧民のそれと、著しい対照をなす。イスラム文明はここ南アラビアに誕生してもよかった。事実はそれに反して、広大な砂漠にラクダとナツメヤシが点在するだけの中央アラビアに於いてであった。

#### IV アラビアの外はどうであったか

アラビアの外といっても、主として北方で、その東にササン朝ペルシア、西にビザンツ帝国が、対立し、時に抗争していた。西暦500年当時、双方の君主は、東がカワード、西がアナスタシウスである。カワードは自分の王位を保つために、東方の遊牧民エフタル族の支持を必要とし、同族に贈る資金をビザンツ皇帝から借りようとして、拒絶された。そのためササン朝軍は、アルメニア、メソポタミアのビザンツ領に攻め込み、或る程度の成功を収めた。しかしちょうどエフタルとの関係が悪化したので、ビザンツと講和した。カワードの次にその子、ホスロウ1世が立った。ササン朝最大の王者といわれる。ビザンツではユスティニアヌス帝が、西ローマ帝国滅亡の後を受けて、ローマ帝国の復活を計り、積極政策を取った。双方の間に戦争があったが、562年に50年間の和平条約が締結された。

宗教面では、キリスト教世界は下のように分裂を重ねていた。

325年 ニカイア公会議：アリウス派、異端とされる

330 ローマ帝国、東西に分裂

431 エフェソス公会議：ネストリウス派、異端とされる

451 カルケドン公会議：単性論派、異端とされる 7)

1054 ローマ・カトリックとギリシア正教と、東西両教会に分裂

ササン朝には国教として、ゾロアスター教がある。カワード王の治世に共産主義的反体制宗教マズダク教が勃興した。ネストリウス派キリスト教徒は、ヨーロッパから追放されて、アジアを伝道場とした。彼らはペルシアで信仰生活を認められていた。

アラビアでイスラム教にとくに貢献したのは、ユダヤ教である。その教徒は世界中至るところに、時に迫害に耐えながら、住みついていた。古代ペルシア帝国のキロス大王は前6世紀に新バビロニアを攻めた際、首都バビロンに捕囚されていたユダヤ人を解放し、故国パレスチナに帰ることを許した。この伝統を受けてか、ササン朝もユダヤ人に比較的寛容であった。なおユダヤ教

徒には、パレスチナ出身のものと、土着民で入信した人とがあった。

アラブ族は両帝国の傭兵となった。中には独立勢力を作り、衛星国となった。まずササン朝の下に入ったのは、南アラビア出身のタヌーフ族の Lakhm 家である。328年の日付をもつ碑文を残している。ヒーラを首都として、メソポタミアを支配下に置いた。他方、500年ころに、ビザンツ皇帝は、やはり南アラビアから来たアラブ族の Ghassân 家を後援して、ササン朝と戦わせた。この国の範囲は今のヨルダン王国の東側に当たる。なお彼らは単性論派キリスト教を採用した。529年にユスティニアヌス帝はジャバラの子、ハーリスを総督に任命した。

#### ガッサーン政権

ハーリス (529—70)

ムンジル (570—81)

ヌウマーン (581—84)

#### ラフム政権

ムンジル (505—54)

アムル (554—69)

カーブス (569—77)

ムンジル (577—80)

ヌウマーン (580—602)

なぜか同名が多い。

アラブ人の間には、ネストリウス派と単性論派とが広まっていた。南アラビアでは、教会や宣教師もいた。ペルシア湾岸にはゾロアスター教徒がおり、ペルシアの文化的影響だけでなく、政治的支配も及んでいたかもしれない。ユダヤ教はヒジャーズ地方に広まっており、ユダヤ教徒は土地を耕作してナツメヤシ栽培に従事していた。

ビザンツ帝国はキリスト教を通じて支配地域を拡大し、とくに紅海沿岸に手を伸ばした。その南にエチオピアがあった。それはずっと以前に南アラビア人が海を渡って来て、土着民の上に立って植民地化したものである。港としてアデュリスがあり、エジプトやビザンツの貿易商人はここまで来て、インド、アフリカ、南アラビアから来る商人と取引した。

5世紀半ばころ、南アラビアは、アブカリブ・アスアドなる者によって、統一された。彼はユダヤ教に改宗したといわれる。この時からこの地方にユダヤ教起源の一神教的碑文が出現する。キリスト教もおそらく根をおろし、ユダヤ教に対抗したであろう。しかし族長はおおむねユダヤ教に改宗するか、またはユダヤ教的慣習を取り入れた。

510年ころ、ユダヤ教にとって転換期が訪れた。ユダヤ教を信ずる領主、ズー・ヌワースが南アラビアにおいて勢力を得た。彼は単性論派を弾圧し、ペルシアに好意を示した。彼は宗教的・政治的・経済的にビザンツを脅かす存在となった。ビザンツは危険をさと、512年ころ、ビザンツの同盟国エチオピアから、遠征軍が海を渡って南アラビアのキリスト教徒の応援に行った。海岸地方にはエチオピア人の支配を受けているものがいたし、エチオピア人そのものも、以前の

占領時代から、その地に残っていた。エチオピア軍は勝利を確信してか、または他の理由によってか、少人数の守備隊を残して帰国した。ズー・ヌワースは、計略をもってエチオピア兵を分散させて殺害し、また各地でキリスト教会に火を放った。ヌワースがやった最大の弾圧は、南アラビアにおける単性論派の牙城であるナジラーンにおけるそれであった。この事件の知らせはビザンツ皇帝に届いた。帝は全キリスト教世界にそれを知らせ、反ユダヤ感情をかきたてた。当時は勿論、それ以後、現代に至るまで、迫害に関して詳細な記事がある。<sup>8)</sup>

ビザンツ皇帝はエチオピアをして報復させた。エチオピア軍は海を渡って攻め入り、ヌワースを破り、彼を自殺に追い込んだ。525年ころのことである。

名目が何であろうと、戦争は破壊である。何教・何派を問わず被害を蒙る。これで南アラビアはすっかり荒廃してしまった。530年ころ、上述のエチオピア人守備兵は南アラビア住民と結んで、アブラハという、アデュリスのビザンツ商人の奴隷であった者を担いで、南アラビアの支配者とした。彼は両帝国に対して中立の立場を取った。そのため周囲の諸政権ーエチオピア、ビザンツ、ペルシア、更にはラフム、ガッサーンからも、使節を受けた。

アブラハは北に向かって攻め上がり、メッカに迫った。彼の軍に、当時として珍しい象（単数か複数か不明）が参加して、人々を驚かせた。それに対して多数の鳥が石を持って飛び来り、空から投げつけてアブラハ軍を追い払ったという、イスラム側の伝説があり、コーラン105章に見える。

ズー・ヌワースの残党はペルシアと相い通じ、ホスロウ1世に南アラビア攻撃を唆した。帝は艦隊を編成して南に向かわせ、難なく南アラビアを占領し、この地方の制海権を手に入れた。マホメットの時まで、ここはペルシア人総督が支配することになる。

南アラビアは、ペルシア、ビザンツ両帝国間の、およびその影響下にある地方政権間の戦争により、衰退していた。アブラハがマリーブにある堰堤の修復をしたことは、彼の功績であろうが、一方、南アラビアの灌漑設備が荒廃しつつあったことをも意味する。それはまた北方、アラビア遊牧民の地位が相対的に向上することを意味する。半島を紅海沿いにインド洋と地中海をつなぐ陸上交通を担当する、またはそれに寄生する存在として、砂漠の民の活躍の機会が訪れた。

遊牧民のあるものは定着し、ラクダの隊商を組織して、高級品の運送業に従事した。陸上の交通手段は、船によるそれと比べて、大量の貨物を一度に運ぶことができない。したがってキャラバンで運ぶものは、重量や体積の割りに値段の高いものである。庶民の毎日の食糧などではない。隊商貿易はしよせんは上流階級のためである。利益は運送する物資の価格の50から100%に達する。自然的・人工的危険に対する保険金が含まれるからである。こうして都市が交通の要地として貿易の利益の分け前にあずかる。こんな都市としてアラビアには、メッカ、ターイフ、メディナなどがあった。

遊牧アラビアに、いわば重商主義経済が起こりつつあった。物々交換はもとより、ディナール金貨やディルハム銀貨を用いる取引も、普及し始めた。都市でなくとも、ウカーズのような市場

でも、内外の商人が往来して繁栄した。この経済構造の変化に、当然、人々の道德意識の変化が伴った。部族の連帯に危機が訪れ、部族の枠を乗り越える者が現れた。ぬけ目のない人が得をする世の中となった。砂漠の仁義、物惜しみしない気前のよさは、もはや成功への道ではなくなった。成り上がり者は傲慢となり、貧者・弱者・正直者が損をするようになった。今までの血縁原理は時代おくれではないか、という漠然たる不安が人々の心の中に生まれた。来た。“砂漠の騎士道”の衰えである。

いま必要なのは、部族を越えた普遍的宗教である。その対象は部族という集団でなく、個人でなければならぬ。他の何ものにも代えがたい個々の人間を救うことが、求められる。部族を越えた宗教なら、ユダヤ教やキリスト教があるから、それに入信したらと言う人もあろう。しかしそれらはよその宗教であり、アラビアの支配をたくらむ列強と結びついている。それを採用することは、すなわちそれを支えている政治権力の下に立つこととみなされる。それではアラブ人の自尊心が傷つく。

アラブ人のあるものはビザンツかペルシアの傭兵である。主人はお金でアラブ人の忠誠を買っている。彼らの反乱を恐れて、彼らを互いに戦わせている。アラブ人はなぜ自分たちすべての利益を念頭に置かないのか。全アラブ人が統一されれば、強力な国家になるはずである。南アラビアはばらばらであったために、繁栄を維持することができなかったことが、教訓となろう。

望まれるアラブ国家とは、アラブ人の理想を求め、変化する時代に即応し、なおかつ遊牧生活から断絶しない、さらには両大国と対等の立場に立つ、というものである。

## V 人間マホメット

マホメットが生まれた場所がメッカであることは確かであるが、生まれた年はわからない。わからないのが当然である。しかし「象の年」という説がある。アブラハが象を含む軍隊をもってメッカへ攻めて来た年という。ただこの年の名は、十二支獣暦と違い、暦でない。多くの学者は570年としているが、確かではない。ササン朝のホスロウ1世の治世(531-79)であったともいわれる。イスラム暦元年1月1日は、西暦622年7月16日に当たる。それ以前はおそらく手近な暦に頼っていたであろう。キリスト教徒なら、太陽暦であるユリウス暦、ユダヤ教徒は太陰太陽暦のユダヤ暦を、それぞれ使っていたはずである。イスラム教で金曜日を集団礼拝日としたのは、ユダヤ教徒が休日である土曜日の前日に買い物のために市場へ来る習慣を利用したものである。ササン朝皇帝の治世を用いるのも、一種の暦である。

マホメットの家系を遡ると、クライシという人がいて、それから血筋が分離する。この全体が「バヌー・クライシ」(クライシの息子たち、クライシ部族)である。クライシから8代目にハーシムがいる。この子孫が「バヌー・ハーシム」で、これはハーシム家と呼んでよかろう。ハーシムの子がアブドゥル・ムッタリブ、その子のひとりがアブドゥッラーである。この人とアーミナ

という女性との間に生まれたのが、マホメットである。この系図は8世紀以後に記録にとどめられたものであるが、系図を尊重するアラブ族のことであるから、マホメットの先祖の血筋は、彼の在世当時からよく知られていたであろう。ただ系図は血統そのままでなく、他人との同盟関係が織り込まれることがある。

メッカの町は、紅海に平行に走る山脈の間の谷に位置する。谷は急傾斜で、表面は岩におおわれ、木も草も生えていない。泉が湧き出ており、「ザムザムの井戸」と呼ばれる。水が得られる土地は希少価値がある。そんな場所には往々にして神殿が作られ、人が集まる。メッカの名は、2世紀の地理学者プトレマイオスが、ここを Mokoraba と名づけており、これは南アラビアにあった文字で MKRB と表記され、神殿、聖域を意味するエチオピア語 mekwerāb から来たものといわれる。メッカとは神殿という普通名詞であった。地元の住民はその名でこと足りていた。後に述べるメディナも、普通名詞から来ている。

そこはまた、南アラビアと地中海、紅海とペルシア湾を結ぶ陸上交通の要衝でもあった。神殿、聖域は、前述のように、人命の安全を保障する場である。危険に満ちた陸地を旅行する商人にとって、井戸水と神殿は、肉体と精神の安らぎの場である。クライシから6代目にクサイイが、5世紀末ごろに神殿の管理人となった。これは彼の部族が上昇する契機となった。

クライシ部族にも多くの家があった。それらはふたつの類に分かれ、一は「外のクライシ」で、町の周辺に住む。二は「内のクライシ」で、谷の底、ザムザム井戸のすぐ周りに住む。マホメットの属するハーシム家など12家がこれである。神殿は井戸の近くにあり、立方体の形をしているので、Ka'ba と呼ばれる。とくにこの建物にはめこまれた黒い石は隕石であり、アラビア中で、広くセム族全体で、崇拜されるものであった。

マホメットが生まれてすぐか、或いはたらちねの母の胎内にいた時に、父アブドゥッラーは、商用でガザへ行行った帰り、メディナまで来た時、死去した。残ったのは妻アーミナ、ひとりっ子マホメット、それにラクダ5頭と、羊数頭だけであったという。

のちにイスラム教が政治権力と一体となると、人々の社会生活の規範が必要になった。マホメット、彼の家族、彼の初期の同志が、話題の中心となった。信者の、あるものは信心深さから、またあるものは好奇心から、預言者とその側近の人たちの言動を知りたがった。彼らがどうした、どう言ったかが、信者の日常の行為の理想となった。相続の方法という大きな問題から、食事の作法といった些細なことに至るまで、の基準となった。それでハディースが編集されたわけで、第1章で述べたように、言い伝えには嘘や歪みが伴う。しかしハディースの伝達者は周到にも「されど神は誰よりもよく知る」と付け加えた。

父に続いて、母も、マホメットが6歳の時にこの世を去った。彼女は息子と奴隷を連れてメディナの親戚を訪問しての帰途であった。孤児となったマホメットは、とりあえず祖父アブドゥル・ムッタリブに引き取られた。しかし祖父は80歳の高齢で、2年後には死んだ。次に彼は父の同母弟、アブー・ターリブの世話になることになった。同母とわざわざ言うのは、歴史上の人物につ

いて、異母兄弟が多かったからである。というのは一夫多妻が珍しくなかったのである。叔父アブー・ターリブはメッカで裕福な商人として知られ、ハーシム家の家長の立場にあった。彼は隊商を率いて遠くシリアまで出かけ、マホメットもそれに参加したらしい。

マホメットが読み書きできたかどうか、推測されているけれども、そのことはさほど重要ではない。なぜなら、当時のメッカを中心としたアラビアで、情報のほとんどが口頭で伝達されており、記録はごくわずかしかなかったはずだからである。

彼は知性あり、冷静な人柄で、会う人みんなに好感を与えたようである。これを認められて、ハディージャという、2度の結婚歴があり、亡夫の遺産に恵まれた女性に雇われることになった。彼女は隊商を派遣してビザンツの商品をメッカの市場にもたらししていた。マホメットもそれに参加して商売の能力を発揮したようである。そこを見こんでハディージャは、彼の雇い主から、妻の位置に変わるようになった。時に彼女は40歳、彼は25歳であったという。晩婚である。夫婦の間に女子は4人生まれて育ったが、男子3人はみな幼くして死んだ。マホメットはアブー・ターリブの子アリーをかわいがった。また妻は自分の奴隷ザイドを夫に贈った。彼はそれを奴隷身分から解放し、自分の子のようにいつくしんだ。

35歳ころ、彼はアミーン（誠実な人）と呼ばれるほど、みんなの信頼を得ていた。家庭的にも、経済的にも、しあわせな日々を送ることができた。かつての貧しい孤児はこんなにも変わった。普通の人間ならこれで満足するであろう。しかし彼は心の底に不満を抱いていた。男の子がないこと、つまり跡継ぎがないこと、それはそのひとつの原因である。それだけではない、彼には野望があった。自分はそのらにいる人とは違う、商売でお金をもうけた連中は威張りかえっている。自分が求めるものは、形あるものや、銭に換算できるものではない。メッカの商売人、政治屋らを遙かに超越して、全アラブ人を導くことが彼の野望である。

どんな社会にも、その社会から期待される役割に適應することが、困難または不可能な人がいるものである。彼らは時に周囲と激しい摩擦を起こす。そのような人々には、類い稀れな才能の持ち主がいる。つまり普通の人が見えないものが見え、人に聞こえない音が聞こえる。それは口では説明できない。マホメットはこんな人間である。それでいて他方、彼はよき夫、よき父であり、誠実な商人、慎重な人間である。彼の精神は、彼の時代や場所を超えた遙かなものに向かって前進していた。

メッカの町には、キリスト教徒もユダヤ教徒も住んでいた。マホメットは毎日彼らと言葉を交わす。キリスト教はこの町で教会もなく、牧師もいない。だからこちたき教義論争も、えげつない宗派対立も、ありえない。教徒たちはインテリでなく、低い地位の仕事に従事している。彼らの信仰は普通の人間の通俗的なそれである。けれども特異な能力を持つ者は、そこから人間や社会の本質をつかみ取ることができる。信仰は聖書や教会にあるのではない。権力に支えられた宗教は、すでに堕落したものである。ユダヤ教徒といえば、アラビア各地のオアシスで農業に従事して成功している。ただ彼らは偏狭で、人付き合いが悪い。

マホメットは、メッカにしながら、アラビア全土、およびその外の世界について、かなりの知識をもっていた。遠くの国々のこまかい出来事は、人間の口から口へ伝えられ、確実にメッカに届いていた。マホメットが目を閉じると、ササン朝ペルシアも、ビザンツ帝国も、具体的な姿となって浮かんでくるのであった。

アラブ人は傭兵として帝国に奉仕している。メッカではずるがしこい人間が勝ち誇っている。部族的連帯は日々にゆるみ、弱者は奴隷の地位に落とされている。このまま進めば破滅しかない。ユダヤ教もキリスト教も「最後の審判」を警告している。マホメットを突き動かしたのは、この危機意識である。

## VI 預言者マホメット

マホメットを取り巻くメッカの環境がきびしくなるとともに、彼の内面にあっても、精神的戦いが起こっていた。いつの頃かわからないが、彼は時々、家から出て、メッカの東北5kmほどの所にあるヒラー山の洞穴にこもるようになった。岩ばかり、何の美しさもない、瞑想には恰好の場所である。山にこもる習慣は、ユダヤ・キリスト教の隠者がやることで、それらに属さないアラブ人一神論者（ハニーフ）も、見習っていた。マホメットは、そのような人たちのことを知っていた。

ここで妻ハディージャの役割が重要である。仕事をして家計を支えるべき男性が、山に入って瞑想にふけることに、彼女は反対しなかった。まことに彼女は神よりも先にマホメットを見出していた。

彼は何を求めていたのか。彼の頭の中には、神について今まで見たり聞いたりしたことが、渦巻いていたであろう。メッカのユダヤ教徒、キリスト教徒、ハニーフ、そして豪商たち、弱者たち、それらすべての上に立って彼らを導くものをマホメットは求めていた。

610年ころ、彼が40歳であったというある日、彼は何ものかの姿を見た。それは暗闇が突然やぶれて太陽が輝くように出現した。自分ひとりそれを見たという意識に、彼は孤独に襲われ、そのまま何日か洞穴の中で過ごした。またある日、今度は声が聞こえた。「汝は神の預言者である。」彼は恐ろしくなって体が震え、地をはいまわった。それから家に帰り、妻に命じてかぶるものを持って来させ、それで頭からおおって、恐怖が静まるのを待った。ハディージャの冷静な振る舞いが尊い。

つぎに彼はこんな声を聞いた：

誦め、凝血から人類を創造し給うた

汝の主の御名にかけて

誦め、汝の主こそ

ペンをもって教え給うた最も貴いお方

人類に知らざることを教え給うたお方      コーラン 96章 1－5 節<sup>9)</sup>

「誦め」と言われて、マホメットは一瞬とまどった。「誦め、って、いったい何を」と問い返した。「誦む」とは、声に出して本を読むことである。メッカでユダヤ・キリスト教徒が聖書を誦んでいるのを、マホメットは見ている。先進宗教が聖なる書物をもっているのが、彼にはうらやましい。それらの隠者が山中の暗い洞穴で、ランプを掲げて聖書を読んでいるのを、彼は知っている。しかしアラブ人は聖書をもたない。ペンとはアラビア語で qalam といい、葦の茎を斜めに切ったもので、それにインクをつけて字を書く。このペンなるもの、彼は手にしたことがなかったかもしれない。

ハディージャは自分のいとこであるワラカが、ハニーフであり、ユダヤ・キリスト教の聖典に深い知識をもつ人であったので、夫を彼の所へやって、説明を受けさせた。ワラカは、マホメットが聞いたものは、神が下したナームス（啓示）であると、教えた。預言者の誕生は、このような暖かい人間関係に恵まれていた。

また初期の啓示に下のようながある。

おお、外衣をかぶるものよ

立て、そして警告せよ

コーラン 74章1－2節

メッカの民に警告することをマホメットは神から命ぜられた。

いな、いな、汝らは孤児を尊ぶことなし

互いに励まして貧者を養うこともなし コーラン 89章18－19節

メッカの富者の不正を神がとがめている。

マホメットが神から啓示を受けたと言ったこと、イスラム教徒はそれを信ずる。イスラム教徒でなければ、信じない。それだけと言ってしまうが、非イスラム教徒はどう考えるべきか。その立場から、とくにキリスト教徒の中には、積極的にこれを攻撃し、マホメットを「嘘つき」と呼ぶものがあつた。人間が神の姿や声を感じることなどありえない、という、近代的といおうか、合理主義的といおうか、そういう立場からの批判である。

フランスのイスラム学者ロダンソンは、この問題について次のように考える：

現在、ある人々は、超自然的存在からの視覚的・聴覚的・精神的メッセージを受け取ることができると、まじめに信じている。まじめであるからといって、これらのメッセージがたしかにかじかの所から来たと、証明できはしない。無意識という概念を使えば、これらのことを理解できる。普通の人間が幻聴・幻覚をもつことを心理学的に研究するなら、今までに見たり聞いたりしたことに、無意識が作用して、新しい連想をつくる、それが幻聴・幻覚である。こんなことは誰にでも納得できる。マホメットの場合は、彼が見聞きした超自然的なものとは、彼が交際していたユダヤ教徒・キリスト教徒から聞いたものなのである。神からの啓示には、彼の実験の経験、思考の材料、夢想・瞑想、人々の議論の記憶などが、切断・変化・転置されて本物の現実の姿で再現し、他の人にはわからないが、彼には客観的な性質を伴う外界の活動と見えたのである、と。<sup>10)</sup>

ロダンソンの研究態度はこうである：科学的態度とは、まず、信頼に値いすることが確かな資



料によって事実であると認められたものだけを、事実として受け入れる。そして、あらゆるものを相応な配慮をもって扱うことである。・・・これは決してヨーロッパ中心主義や植民主義からきたものではない。ヨーロッパの学者は自らの歴史を研究するのに、この方法によっている。そのような批判的態度は他の諸文明（とくにイスラム文明）の歴史家も認めている、と。またロダンソンはいう：自分は無神論者であるが、宗教的世界観を理解することができる、それは、美術批評家が画家の作品を、健康な医者が病人を、経営学者が経営者を、理解できるのと同じだ。宗教に対する理解において、私は信者に劣るとは思わない、と。

またこうも言う：思想を創始した人たちは、人々にむかって、生きている理由と、果たすべき個人的・社会的役割を示してきた。思想が宗教である場合、彼らは、彼らのメッセージがこの世界の遙か上から来た、そしてそれが表すものは単に人間的である以上の何物かであると、主張し（またそれが一般に承認され）てきた。無神論者としては、その超人間的起源は、まだ証明されていない、というしかない。しかしこのことはメッセージを侮辱したことにはならない。無神論者は超人間的起源に対してむしろ高い評価を与えるであろう。なぜならそれは人間的状況を超えようとする偉大なる努力であるからである。要するにそれは我々がまだ理解していない人間の心の機能に根ざしたものと、認められる。また無神論者はそれを発見する興奮を覚えるし、また多くの情性的信者にまさってそれに共感するはずである。こういう信者にとって、上からのメッセージなど珍しくないし、明確な意識をもってかわりばえのしない毎日を送っておればよいからである、と。<sup>10)</sup>

ここで考えたいのは、ロダンソンのような非イスラム教徒で、ロダンソンと違ってアラビア語・イスラム教にさほど知識のない人が、マホメットが神の啓示を得たことを、どう理解すればよいのか、言い換えれば、そういう人にわかってもらうためには、どう説明すればよいのか、である。普通の人に理解できるように説明することは、重要である。その説明をここで試みる。

上に引いたロダンソンの文に、意識・無意識の語が出たので、高橋義孝が解説する Carl Gustav Jung（1875－1961）の「集合的無意識」を紹介する：

個人的無意識というものがある。それはあるひとりの人が一回的なその生涯・生活のうちに作り出し獲得した無意識で、結局はまた意識化される無意識である。もし無意識がこの種の無意識だけから成り立っているなら、抑圧を廃棄することによって、完全に意識化されうる。ところが、神経症患者や健康人の夢などを分析すると、必ずしもそうではない。即ち、個人的無意識の層の下に、それとは別の、無限に広大な無意識の層があることが、わかってきた。それが即ち集合的無意識である。それは個々人が個別的存在として、各々の一回的な生涯で獲得したものではなく、ひとつの全体としての人類の心が、幾星霜を閲し来ったその全過程・全歴史において、そもそもの始まりの頃から、人類のひとりひとりによって、徐々に獲得されてきた無意識である。フロイトがいう無意識は個人の心の無意識であるのに対し、ユングが唱えた集合的無意識は、人類の心の無意識である。それは、そのものとしては無意識であり、且つまた、その上に我々の意識的・

個人的な心がのっているところの、祖先全体から遺伝された、一般的な精神的素質の広汎な基盤である。換言すれば、この集合的無意識の中には、人類の生活一般のそもそもの始まりから、今日現在に至るまでの、人類の全発展の痕跡がしるされている。

(中略)

現代文明社会のもっとも一般的にして深刻な心理学的問題は、合理的なものを過度に強調し、その裏をなす生命の本能的・非合理的な諸基盤を蔑視することにある。人間内部のこのような本能的・非合理的なものは、フロイトが言うように折伏しなければならないものでは決してなく、逆に、そういうものを計算の外に置いて生活を続ければ、いつかは破局が来る。二度の世界大戦はその心理学的証明である。意識的立場の強調と、それに対する無意識の反応とから生まれる神経症のケースが、意識的意志を過大評価する現代における精神科医の治療実践の大部分を占めている。とにかく、破局が不可避となっているほどに、必然的偏向によって高められた意識は、人類の原始形象から離反してしまった。……今日、人は宗教を信じようとしなない。そのかわり、人は理性・知性・認識に最大の期待をかけている。しかしその背面には、大戦争や、人間の自己喪失がある。名状しがたい不安感が人間に常につきまとう。諸々の葛藤がおこる。この局面を開くするには、集合的無意識の力を借りるはかない。……もし無意識が人格化されるとすれば、それは、性別も老若も生死も越えた、一個の集合的人間であるだろう。そして彼は、百万年、二百万年の間に蓄積された人類の、いわば不滅の経験を自由に活用しうるだろう。そして、その無尽の経験を駆使する比類なき医者であるだろう。けれど彼は、個人の、諸家族の、諸種族の、諸民族の、生活を繰り返しくりかえし、無数に体験してきたのであり、もっとも生き生きとした内的感情のうちに、生成と繁栄と死滅のリズムをもっているだろうから。<sup>11)</sup>

「無意識が人格化された」のが、預言者マホメットではあるまいか。

ユングは合理主義の過度な尊重という時代への不安を覚え、学説を展開した。我がマホメットも、時代の移り行きに憂いを抱いた。もうひとり、イギリスの文人 Thomas Carlyle (1795—1881) は、1840年の講演「英雄崇拜論」においてマホメットを取り上げて時代精神を論じている。その抜粋：

マホメットをもって、策略にたけた欺瞞者、虚偽の化身となし、彼の宗教をば山師的詐術と痴呆との集塊に過ぎずとなすが如き、我々の間に広く流布されている臆説は、今はたしかに何びとの心にも支持しがたいものとなりかけている。キリスト教に対する善意の熱心さから、この人物の周囲に積み上げられた虚構の説話は、いたずらに当事者たる我らの恥辱となるばかりである。

(中略)

予が試みた読書のうち、これほど厄介なものは、かつてなかったといわざるをえぬ。粗笨、未熟にして、退屈な紛乱せる混雑物。果てし無き重複、冗辯、錯乱。粗笨、未熟のきわみ、——要するに耐えがたき愚昧。義務の念からでなければ、到底、ヨーロッパ人はコーランの通読に堪えないであろう。……しかしながらおよそ人の衷心より来る書物は、他人の衷心に達せずには

おかぬものである。コーランの根本的特質は、それが純真な点、それが誠実の書たる点であろう。・  
 ・・・・これは偉大にして粗野な人間精神の混乱せる発酵である。粗野にして無教育、読むすべすら知らず、しかも熱烈、真摯にして、言葉に自己を表現せんとして苦悶懊悩する精神である。彼のさまざまな想念は、全然形体をなさず、混沌模糊の状態で、そこにのたうちまがくがままの未定形さで投げ出されている。

(中略)

マホメットは、ベンサムやペイレールの徒の如く、正と邪とを取って、両者おのおのの得失、即ち究極の快樂を計量し、しかして加算、減算を用いて一切を総計して、正味の結果を算出し「要するに正の方が著しく重量の超過を示すではないか」と問うことはせぬ。いな、正をなすは邪をなすに優るということではない。両者の関係は、生の死におけるごとく、天国の地獄におけるごときものである。一は断じてなしてはならず、他は断じてなさずにおいてはならぬ。人は両者を量ってはならぬ、両者は較量を絶している。ベンサム輩の功利、即ち得失の計算による徳行、一この神の世界を生命なき非情の蒸気機関に貶しめ、人間の無限なる天上の靈魂をば、乾草やアザミを量り、快樂や苦痛を量る、いわば乾草秤に貶しめる。一この輩と、マホメットと、いずれが人間および宇宙における人間の運命について、より貧寒な、より虚妄の見解を下しているか、と諸君が尋ねるならば、予は答えて言おう、「マホメットにあらず」と。<sup>12)</sup>

「最大多数の最大幸福」を唱えて、資本主義の倫理を説く Jeremy Bentham (1748-1832) への批判として、部族的連帯から商人道徳へ移ろうとしているメッカ社会を憂慮するマホメットをもってきたのは大胆かつ適切である。

## VII 伝統と革新

神の初期の啓示に、多神を否定する内容のものはなかった。アッラー以下、有名・無名の神々はどうなるのか。最高神としてアッラーがあり、その娘に当たる三女神がある。その他、無数の神を種々の集団が崇拜している。マホメットはユダヤ・キリスト教の神を考えているだろう、とメッカの人たちは思っていた。それなら今までと変わらない。だから彼らに動揺は起こらなかった。マホメット自身の性格からも、彼は革命家ではなく、過激派でもなかった。「孤児や貧民をいたわれ」という神の教えは当然で、そうすべきだと誰もが考えている。金持ちが実行したがないだけである。

マホメットを通じての神のお告げを最初に受け入れたのは、まず彼の身内、つまり妻ハディース、それから彼のいとこアリー、それと解放された奴隸ザイドである。彼の近親に反逆するものがいなかったのは幸運である。

他人では、アブー・バクルがいる。彼はマホメットより2、3歳年少、勤勉な小商人で、温厚な人柄から、町の人々の信頼を得ている。疑いもためらいもなく人に奉仕する型で、マホメットにとってはよい相談相手である。

もうひとりの重要な人物ウマルの入信について、おもしろい話がある：ある日、彼は興奮して、刀を抜いて、イスラム教徒の集会所であるアルカム邸へ急いでいた。それを見た人がどこへ行くのかと問うた。ウマルは答えた「マホメットを探して殺すのだ。あいつはクライシ族の神々をけなし、我々の信仰をあざけり、我々の不和の種をまいている」と。別の男がたずねた「人を殺して、無事に地上を歩けると思っかね[復讐のこと]。早く家へ帰って自分の家をちゃんとする方がよい。」「私の家で何かあるのか。」「そんなこと、この町のみなが知っている。」ウマルは自宅へ引き返した。家の中では、入信した鍛冶屋ハッバーブが、ウマルの妹とその夫にコーランを読んで聞かせていた。一同はろうばいし、ハッバーブは隣室に逃げた。妹は座ったままで、コーランをスカートの下に隠した。ウマルは逆上して彼女をなぐりつけた。隠していたコーランを取り出して、読ませた。それを聞かや、ウマルは感嘆の声を上げた。ハッバーブも隣室から出て来て、「マホメットもウマルが入ってくれるよう祈っていました」と抜け目なく言った。ウマルは刀を鞘に納めて、アルカム邸に向かって走り去った、と。うまく書けば芝居の脚本になろう。時にウマルは25歳の若者であった。

マホメットは慎重な人で、自分の主義を押し付けることはしなかった。しかしメッカ側から見れば、彼の主張が自分たちの利益になるのかどうか、自分たちが拝んでいるご神体を、彼はどう見るのか。彼自身、あくまで謙虚であったが、その主張がもたらす影響を、人々は彼自身以上に知っていた。彼は神から話しかけられるという。その彼がメッカの町内会の取り決めに従わねばならないか。神の命令はメッカの長老会議の議論より下にあるのか、など。彼だけが神に選ばれたからには、彼は最高の権力をもってもよいのではないか。聖と俗の区分のない社会においては、神は預言者を通じて、精神と物資を支配する。これはメッカの伝統的構造をくつがえすことになる。既得権をもつ者はそれを失うことを恐れ、革新に抵抗する。マホメットはやはり人間、迷いがあって、こんな啓示を得た。

おまえたち、アッラーとウッザーと

三番目のマナート考えたか

彼らは高貴な白鳥

そのとりなしは期待できる

これは三女神を是認したもので、クライシ族の人々は、これを聞いて喜んだという。この譲歩はマホメット集団の存在意義を否定するのではないか。アッラーの下に三女神がいるとは、今までのアラビアでよく知られていたことである。それが罪人のために“とりなし”をして、天罰から救うのか。女神にお供えをすれば、「最後の審判」を免れるのか。女神がアッラーと異なる決定をしたら、どちらを信じればよいのか。こうしたマホメットのあいまいさは、彼の支持者からも、メッカ保守派からも、批判を浴びた。

そこで訂正の啓示が出た。「アッラーに女の子があるというのか。」これは三女神をアッラーの娘とする、それまでの人々の信仰を明確に否定した。

そろそろ迫害が始まった。文献ではここで悪役を作る。マフズーム家のアブー・ジャフルはマホメットに従った人にこう言われたといわれる。「お前は父親の信仰を捨てた。お前と父親と、どちらが立派か、知っているだろうに。」

イスラム教徒への風当たりは、身分の低い者ほど強かった。名門の出で、氏族の保護が得られる者はよかった。預言者にとってすこぶる有難いことは、叔父アブー・ターリブが、自分は新興宗教に入らなかったのに、ハーシム家長の義務として、厄介な甥を守り続けたことである。彼こそは、新宗教集団と伝統社会を結びつける輪の役割を果たした。この結びつきがなかったら、マホメットの運動は単なる過激派のそれで、すぐに消え去ってしまったろう。伝統を批判しつつ、それとの妥協を計ることが、歴史を創造する者の役割である。

新しい宗教組織には、それにふさわしい外観が伴うはずである。人は神、または神々に感謝せよという。感謝は礼拝という形で表現しなければならない。それぞれの信仰に独特の礼拝なり儀式がある。マホメット教団はその形式に、身近なキリスト教、つまり単性論派やネストリウス派のそれを採用した。マホメットにとって幸運なことに、彼が接した教徒は、下層で無学の人であり、高級聖職者の教義論争・宗派抗争と無縁であったことである。彼はメッカに住んでいる現実のユダヤ教徒、キリスト教徒—それらはアラビアにない聖なる書物をもつ民である—から、一神の信仰をつかみとった。しかし彼の伝える神のことばが純粹のアラビア語であることは、教えが他宗教からの借り物であるという非難を避けるのに役立った。

マホメットの人生に転機が訪れる。人間たるものにとって避けられない離別である。妻ハディージャと叔父で保護者アブー・ターリブが、ほんの数日のうちに相次いでこの世を去った。619年のことである。同志アブー・バクルは、まだ6歳の自分の娘アーイシャを彼の未来の伴侶として与えた。アブー・ターリブなき後、ハーシム家の長はその弟アブー・ラハブが継いだ。イスラム文献は、前者を善玉、後者を悪玉とする。ラハブは始めは兄の遺志を継いでマホメットを守るつもりであった。ところが反イスラム派がラハブに圧力を加えてきた。祖父アブドゥル・ムッタリブ、父アブドゥッラー、叔父アブー・ターリブは、今あの世の地獄で苦しんでいることになるのか、と彼らは疑う。それを聞いてラハブはマホメットに問いただした。彼はそれを肯定し、それが自分の信念であると答えた。ラハブは彼の身内意識のなさに立腹し、保護をとりやめた。コーランはラハブを呪う。

預言者とその信者に対するいやがらせがつのってきた。組織の前途は暗く、神の助けが必要となった。メッカの町は不信心者で満ちており、天罰が下る日は迫っている、という雰囲気、彼らをつつんでいた。自分たちが生き残り、発展するには、他の地をみつけないといけない。彼は高地にあって涼しく緑の多いタイフに目をつけた。そこにはメッカの富人が土地を所有している。彼はそこの主だった人々を訪ねて交渉したが、だめだった。「お前さんがほんとうに神のことばを聞いたのなら、我々には高すぎる。神のことばを聞いたのが嘘なら、我々には低すぎる」と、彼らはからかった。そして奴隷やならず者をそそのかして、マホメットに向かって石を投げ

させた。彼は反イスラム派のクライシ人の所有する果樹園に逃げこんだ。生命の危険のある者を助けるという砂漠の仁義が、まだ生きていた。持ち主は彼をかくまった。メッカへ戻る時も、紛争があった。反対派がマホメットの帰国を阻止するか、危害を加える可能性があった。主のいない教団では、アブー・バクルやウマルでも、メッカ多数派に対抗する実力に欠ける。彼は何人にも使者を町へ遣わして援護を要請した。アラブ族の慣習はここでも働いた。善意の旅行者を保護する義務が守られて、ある人がその要請を受け入れ、武装した一団を出してマホメットを無事に故郷の町へ迎え入れた。

次に彼が目をつけたのは、メディナである。ここは前6世紀、バビロニアで Yatribu として知られ、後2世紀のプトレマイオスの地図には Yathrippa の名が見える。しかし地元では、ここを開発したユダヤ人は medīntā（集落）と呼び、アラビア語の madīna となった。地元では単に「集落」というだけで十分である。メッカが農地のないことから「都市」であるのに対し、ここは「農業集落、農村」である。この地がイスラム集団の移住先になった理由は、次の三つである。

- 1 メディナでは内部の対立が止まず、農業生産に悪影響を与えている。
- 2 メディナはメッカが商業で繁栄していることに対抗意識をもち、神のことは受けたといわれる人物に調停してもらい、村の活性化を計る。
- 3 マホメットの両親がここで亡くなって、ともに葬られているという個人的思い出が彼にある。

かくして聖遷が行われ、イスラム教は次の段階にはいる。

メディナでは、故郷を離れた信者の生活維持の必要から、物への要求が増加する。さらにマホメットの死後は、イスラム教の拡大に伴う、教義的・階級的・地域的な分化が顕著となる。すなわち、宗教のなかで占める政治の重みがしだいに大きくなる。

#### 註

- 1) 中村廣治郎『イスラーム思想と歴史』 東京大学出版会、1977年。
- 2) 中野英治郎『アラビア紀行』 明治書房、1941年。エジプト駐在公使横山正幸、商工省技師（地質専門）三土知芳に同行。日本人最初のサウジアラビア入国者。日程は1939（昭和14）年3月26日、ジェッダ着、翌日発、3/31リヤード着、4/9発、4/13ジェッダ着。
- 3) 本多勝一・藤木高嶺『アラビア遊牧民』 朝日新聞社、1966年。1965年5-7月、真夏のアラビア砂漠滞在記。
- 4) 井筒俊彦『イスラーム生誕』 人文書院、1979年。
- 5) ジンについての一例：岩村忍『アフガニスタン紀行』（1954年の調査旅行の記録、朝日新聞社、1955年、同文庫、1992年）にいう：ハザーラジャートで、ある日、オーサヒ〔地名〕の裏の山にジン・妖精のいる洞

窟と、ふしぎな泉があるというので、案内してもらって見にいった。・・・高さ1.3m、奥ゆき2mぐらいの洞窟が二つ並んでおり、天井は炭化している。住居址であることは確かである。案内者は、ここはジンの住み家であるという。・・・ジンに関する説話は2、3回聞いたが、別に変哲もない。夜歩きすると、よくジンに会うそうだが、この妖精はいたずらするだけで、人の命を取るようなことはあまりないらしい。

6) 山田憲太郎『香料の道』中公新書、1977年。

7) 村山盛忠『コプト社会に暮らす』 岩波新書、1974年は、著者が1964年から68年まで、エジプトのコプト教会で宣教師として勤務した記録である。この中で著者は、14頁にわたって、キリスト教世界の分裂を述べている。なおコプト教会は単性論派に含まれているが、著者によれば「単性論はコプト教会の信仰理解とは全く異なる。」

1992年1月に国連事務総長となった Boutros Boutros-Ghali は、エジプト出身のコプト教徒である。

8) Rodinson, Maxime, *Mohammed*, Pelican Books, 1973, p31に、according to one source として、史料名を出さず、427名の聖職者を裁判抜きで火あぶりの刑に処し、4,252名のキリスト教徒を殺し、15歳以下の者、1,297人を奴隷にした、という。この細かい数字はキリスト教徒によるか？

またリチャード・ベル『キリスト教の環境におけるイスラム教の起源』（日本語訳書題名『イスラムの起源』）では、訳書の2頁にわたってナジラーン事件を述べ、「それは西暦523年10月に発生した」と厳密である。細かさは、正確よりも護教を意味することがある。キリスト教徒は世界史を通じて、情報戦争にもっとも強いようである。

9) 嶋田襄平『マホメット』 清水書院、1975年（のち清水新書）。

10) ロダンソン、上掲書、77頁。同、xii-xiii頁。この拙稿は実は、ロダンソンのマホメット伝の読書ノートである。その要点を選び、自分の知識と体験を加え、叙述した。彼はフランス共産党員であったことがある。しかし学問的態度に偏向はなく、イギリスの W.Montgomery Watt らの研究成果を十分とりいれている。

11) 高橋義孝『無意識』新潮社、1955年。

12) 山宮允『カーライル マホメット』 研究社小英文叢書、1942年初版。  
カーライル著、老田三郎訳『英雄崇拜論』 岩波文庫、1949年。

(1993. 8. 23 受理)